

『佛説心明經』の成立

——説一切有部の大乘經典という可能性——

平 岡 聡

0. 序

一度は決定的に解決したかにみえた大乘仏教起源の問題が、近年、従来とは違った文脈で再燃しつつある。大乘の起源を大衆部に求める従来の説を覆し、颯爽と登場したのが平川彰の「在家仏塔起源説」であった。これは、大乘仏教起源の問題を、従来の思想中心の研究手法によってではなく、律文献をベースに教団という社会的視点から「出家／在家」という対立軸で新たに捉え直すことにより、大乘仏教の起源は仏塔に依止した在家信者にあるとするものであった。

しかし近年、この平川説に対して次世代の研究者からは疑義が呈され、平川説の弱点が様々な角度から暴かれてきた。そして再び伝統的な仏教教団との関連においてこの問題が再考されはじめたが、それは大乘仏教の起源を単一の部派に求める、平川説以前の「大衆部起源説」のような単純な構図ではなく¹⁾、まずは個別の大乘經典を個別の部派との関係で考察してみようという動向にある²⁾。そして、このような個別の研究³⁾が点として積み重なったとき、それら複数の点が描き出す輪郭、それこそが大乘仏教の起源に関する新たな仮説となるだろう。

そこで今回は、その複数ある一つの確かな点とすべく、静谷正雄によって「原始大乘經典」に位置づけられる心明經を取り上げ、これを伝統的な部派仏教、とくに説一切有部との関連で考察してみたい。

1. 心明經の内容

平川が提唱した仮説は日本において多大な影響を仏教学会および仏教研究者に及ぼし、またそれに触発された研究も出現したが、その一つに静谷正雄の研究がある⁴⁾。静谷は平川説に基づきながら、初期大乘經典をさらに新古層に分け、小品般若經を境に、それ以降を「初期大乘」、それ以前を「原始大乘」と命名した点が特徴だが、今回ここで取り上げる心明經は、静谷の言う原始大乘に分類され

(132)

『佛説心明經』の成立 (平 岡)

る古い經典である。原始大乘經典と初期大乘經典の違いについては、様々な点が列挙されているが、まとめると次の三点となる。

- (1) 現在他方仏を認め、仏果の追求を説くが、「大乘」の語を持たない。
- (2) 「法師」「無生法忍」「經卷供養」「陀羅尼」という語が出ない。
- (3) 「六波羅蜜」は説くが、ことさらに「般若波羅蜜」を強調しない。

そして、このような特徴を持つ經典を丹念に掘り起こし、それを静谷は原始大乘經典と名づけた。これに類する經典は、大阿弥陀經、阿闍伽国經、舍利弗悔過經、また支謙訳の經典として、阿難四事經、月明菩薩經、龍施女經、七女經、老女人經の五經、竺法護訳の經典として、菩薩行五十緣身經、梵志女首意經、仏説心明經、さらに太子和休經と金剛般若波羅蜜經である。今回、考察する心明經は竺法護 (CE 239-319) 訳の原始大乘經典として列挙されているが、内容は極めて短く、大正藏經で1頁に満たない小經だ。では、その内容を簡単に紹介しよう。

説処は王舍城の靈鷲山。世尊は午前中に乞食にでかけ、ある婆羅門の家の前で大光明を放った。すると、婆羅門の妻が食事を手にしてその光明を目にし、体が和らいだ。そして世尊の素晴らしい相好を実際に見ると、第一定 (初禪?) を得た。嬉しくなった彼女は〈世尊に上等な食事を布施したいが、邪見を抱く愚かな夫は、私が世尊にご馳走を布施するのを見れば、必ずや恨みに思うに違いない。世尊にご馳走を差し上げたいが、夫のことを思うと、そうはできない。どうしよう〉と逡巡したあげく、一杓の粗末な飯汁をブッダに献上した。すると、その飯汁はブッダの威神力で百味を具えた食に変わった。

ブッダは詩頌を説き、(1) 金銀の鞍をつけた百匹の馬、(2) 珍宝を満した七宝の車、(3) 瓔珞で飾られた百頭の白象、そして (4) 七宝の瓔珞で身を飾った転輪王の玉女百人を人に施すよりも、一杓の飯汁の方が勝ると、彼女の布施を称賛した。これを聞いた彼女の夫は疑念を抱き、「一杓の飯汁がどうして百匹の馬や七宝の車に勝ろうか」とブッダに詰問する。ブッダが長広舌を露わにして顔を覆うと、それは梵天にまで及んだ。ブッダは婆羅門に「私は長時に亘って六波羅蜜を行じてきた。その私がどうして嘘をつこうか」と告げ、両者の間に問答が始まる。

ブッダ「王舍城と舍衛城との間に五百台の車の陰となる尼拘類樹があるか」

婆羅門「ございます」

ブッダ「その樹の種の大きさはどれほどか」

婆羅門「芥子粒ほどです」

ブッダ「お前は嘘つきだ。芥子粒がどうしてあれほどの巨木になろうか」

婆羅門「本当ですよ。欺してはいません」

ブッダ「種は芥子粒ほどでも、成長すれば広大な樹木になる。同様に食事の供養もその果報は量りがたいのだ」

すると婆羅門は黙ってしまった。その時、ブッダは微笑を示すと、口から五色の光が放たれ、十方における五趣の有情を照らした。その光明で、天は止を欲し、人は心を喜ばせ、餓鬼は満腹になり、地獄の有情の苦痛は和らぎ、畜生の罪は除かれた。この後、光明の帰入場所と記別の種類が説かれる。そして阿難がブッダの微笑の意味を尋ねると、ブッダは「彼女は死後、女身を転じて男子となり、三十劫の後に成仏して、心明如来となるだろう」と予言する。

婆羅門は自分の罪咎をブッダに懺悔し、出家して沙門となると、ブッダは彼に四聖諦を講説し、それを聞いた彼は漏尽を得た。

このように、本経は「大乘」には言及しないが、六波羅蜜や成仏を説く点で、静谷の言う「原始大乘經典」の要素を満たしている。最後に「四聖諦を聞いて漏尽を得た」と説くあたりは、大乘經典と言うよりは初期經典の残滓を感じさせるし、六波羅蜜や成仏を除けば、全体として大乘色の極めて薄い内容である。

2. プロットの比較

インドにいてニャグロード樹は、小さな実が大きな樹に成長する典型例のようであり、『チャンドグヤ・ウパニシャッド』(vi, 12.1-2)にも同様の話が見られるが⁵⁾、仏典ではこの心明經以外にも、ほぼ同じ内容で平行話が二つ存在する。一つは根本説一切有部毘奈耶（以下、MSV）薬事（= Divyāvadāna 第4章）、もう一つはに大智度論である⁶⁾。では各資料のプロットをまとめて比較しよう。

心明經 (T. 569, xiv 942a-943a)

- ・ブッダは王舎城の靈鷲山から乞食に出掛け、婆羅門の家の前で光明を放つ。
- ・それを見た婆羅門の妻は浄信を抱き、一杓の飯汁を布施する。
- ・ブッダは詩頌を説いて、彼女の布施を称賛する。
- ・それを聞いていた夫の婆羅門はブッダに疑念を抱いて詰問する。
- ・ニャグロード樹に関する問答で、婆羅門はブッダに論破される。
- ・ブッダは微笑を示すと口から光明が放たれる。

(134)

『佛説心明經』の成立 (平 岡)

- ・光明の帰入場所と授記の別の説明。
- ・アーナンダの質問にブッダは答え、彼女が成仏することを予言する。
- ・婆羅門は懺悔した後に出家し、四聖諦の教えを聞いて漏尽を得る。

MSV 薬事 (T. 1448, xxiv 36a3-37a5, Divy. 67-72)

- ・ブッダはニャグローディカー村で乞食していた。
- ・婆羅門の娘がそれを目にして浄信を抱き、麦焦がしの布施をする。
- ・ブッダは微笑を示すと、口から放たれた光明が、上方と下方に進む。
- ・授記の定型句

下方の光明は地獄の有情の苦痛を和らげる。

上方の光明は天界で「無常・苦・空・無我」と声を発し、詩頌を唱える。

(その後、光明の帰入場所と授記の別の説明)

- ・アーナンダの質問にブッダは答え、彼女が独覚になると予言する。
- ・婆羅門の夫はそれを知ると怒りを生じ、ブッダのもとに赴いて詰問する。
- ・ニャグローダ樹に関する問答で、婆羅門はブッダに論破される。
- ・論破された婆羅門はブッダに教化され、三帰依して優婆塞となる。

大智度論 (T. 1509, xxv 115a14-c2)

- ・ブッダは婆羅門城で乞食していた。
- ・ブッダを妬んだ婆羅門城の王は施食を禁止したので、食が得られない。
- ・ブッダの相好を見て浄信を抱き、ある老女だけが弊食でよければと施食する。
- ・微笑を示したブッダの口から放たれた光明は天地を照らし、眉間に帰入する。
- ・アーナンダの質問にブッダは答え、彼女が独覚になると予言する。
- ・傍にいた婆羅門はそれを聞いて、ブッダが大妄語したと詩頌で説く。
- ・ニャグローダ樹に関する問答で、婆羅門はブッダに論破される。
- ・論破された婆羅門はブッダに教化され、預流果を得る。
- ・これにより、婆羅門城の王や臣民は仏法に帰依し、浄信を得る。

3. 各資料の共通点および類似点と相違点

細かい点で違いはあるが、各説話の共通点は以下のようにまとめられよう。

ある女性がブッダの姿を見て浄信を抱き、ブッダに食事を布施すると、ブッダは彼女に記別（成仏／成独覚）を与える。それを知った婆羅門はブッダに難癖をつけるが、ニャグローダ樹を例に取った問答でブッダは婆羅門を論破し、彼を教化する。

では次に、各資料の類似点と相違点を確認する。

(1) 女性と婆羅門との関係 ブッダに施食した女性とブッダに難癖をつける婆羅門との関係を夫婦とするのは心明經と MSV 薬事であり、大智度論は両者を夫婦としない。

(2) 授記の定型句 MSV 薬事には説一切有部特有の詳細な授記の定型句が見られる。これに対し、心明經にも素朴な形の定型表現が見られるが、大智度論にはこれがない。なお、授記の種類と光明還入の場所との対応を説く仏典は、この他に増一阿含經⁷⁾がある。静谷はこれらを比較しているのので、それをここに示すが⁸⁾、この比較から、心明經と MSV との親和性は明瞭である。

授記の種類	心明經	増一	MSV
成仏	頂上	頂上	頂上
独覚	面門	耳	眉間
声聞	肩斗	肩上	口
生天	臍	臂中	臍
生人中	膝	両脇	膝
餓鬼	足心	腋	足指
畜生	足心	膝	踝
地獄	足心	脚底	足下

(3) 説話の流れ 全体の話の流れは、心明經の場合、「女性の施食→ブッダによる彼女の布施の称賛→婆羅門の難癖→論破→微笑放光と授記の定型句→授記→婆羅門の教化」となっているが、MSV 薬事と大智度論は「女性の施食→微笑放光と授記の定型句→授記→婆羅門の難癖→論破→婆羅門の教化」となっており、「彼女に対する授記」と「婆羅門の難癖」の順番が違う。

(4) 授記の内容 MSV 薬事と大智度論は彼女に独覚の記別を授けるのに対し、心明經は成仏の記別を授けている。

(5) 婆羅門の教化 MSV 薬事と大智度論では、教化された婆羅門が在家信者にとどまっているが、心明經では出家して漏尽を得ている。

この比較から、三者のうち親和性があるのは心明經と MSV 薬事 ((1) と (2))、あるいは MSV 薬事と大智度論 ((3) と (4) と (5)) であり、心明經と大智度論には接点がないことが分かる。つまり MSV 薬事を中央に挟んで一方に心明經、他方に大智度論が位置するという関係になり、両脇の心明經と大智度論とは直接重ならないので、心明經の成立を考える際に考慮すべきは MSV 薬事との関係となる。

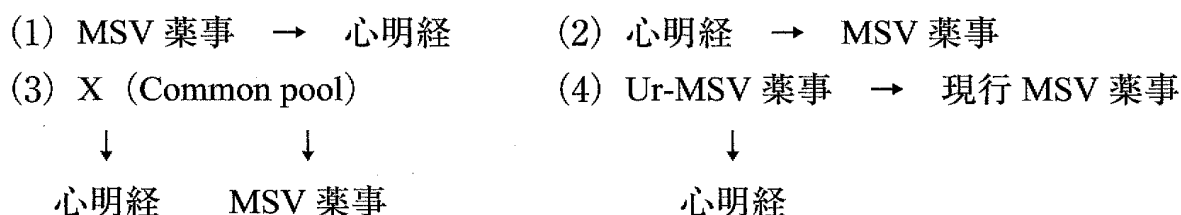
(136)

『佛説心明經』の成立（平 岡）

4. いくつかの可能性

では心明經と MSV 藥事との関係をいかに考えるべきか。以下、その可能性を幾つか考えて見たい。まずは一方が他方に影響を与えた場合である。これには、MSV 藥事が先行し、それに基づいて心明經が成立したケースと、逆に心明經が先行し、それに基づいて MSV 藥事が成立したケースの二つが考えられる。

これとは別に第三の資料を念頭に置いた場合を考えて見よう。まずは共通の源泉（common pool）があって、そこから心明經と MSV 藥事の両者が別々に成立した場合が想定される。この場合、心明經と MSV 藥事に直接の影響関係はないことになる。また授記の定型句の発達度合いを考えた場合、詳細な授記の定型句を説く現行の MSV 藥事が成立する前にもっと簡素な定型句が説かれていた MSV 藥事の Ur-text を想定し、その Ur-text に基づいて心明經が成立したという可能性も考えられる。これらを図示すると、次の通り。



現段階で断定的なことは言えないが、心明經における成仏授記が、それまでの仏教には見られなかった新たな実践（たとえば六波羅蜜）によるものであれば、心明經の独創性および MSV 藥事に対する先行性は高まるものの、ブッダが記別を与える機縁となった彼女の行為がブッダに対する食事の布施であることを考えると、旧態依然とした伝統的な善業であるから、現行の MSV 藥事あるいは MSV 藥事の Ur-text が先行し、それに基づいて独覚授記の部分を作仏授記に変更したと考える方が自然なように思われる。

5. 説一切有部との関係

では最後に説一切有部と心明經との関係について考察する。これまで見てきたように、心明經の説話の内容が MSV 藥事の説話と類似するという点だけをとっても、心明經の成立に説一切有部が深く関わっていた可能性が高い。同様の話は 大智度論 にも見られたが、心明經との親和性が 大智度論 よりも MSV 藥事にあったことはすでに確認したとおりである。

つぎに指摘すべき点は授記の定型句である。説一切有部系の資料に見られる授

記の定型句は、(1) ブッタの微笑と光明、(2) 光明の巡回（地界／天界／天界で発せられる詩頌）、(3) 光明の帰入場所と記別の種類の説明、(4) アーナンドの質問、そして (5) ブッタの回答、という五つの要素からなるが⁹⁾、ここでは (2) と (3) に注目する。(2) の光明の巡回に関して、天界への巡行を説く仏典は多いが、下界への巡行を説く仏典は、管見の及ぶ限り、三つしかなく、そのうちの一つが心明経である。また (3) に言及する仏典は三つしかなく、心明経と MSV とが類似することについても、すでに指摘したとおりである。

最後に、もう一つだけ、両者の接点を指摘しておきたい。心明経には彼女の布施をブッタが詩頌で称賛するプロットがある。これは MSV 薬事や大智度論にはない心明経独自のプロットだが、これに類似する詩頌はアナータピンダダの入信説話に見られ、若干のバリエーションを含みながら、現存の広律すべてに見られるので、心明経の詩頌と現存の広律に見られる詩頌を比較してその異同を確認すれば、心明経の部派決定に役立つ。では、彼女の布施と比較される心明経所説の項目、および浄信を抱いたアナータピンダダがブッタに向かって一步を進める功德と比較される諸広律所説の項目に注目しながら比較する¹⁰⁾。

心明経 (T. 569, xiv 942b7-16)

假以馬百疋 金銀綯鞍勒 (中略) 設以七寶車 載滿諸珍琦 (中略) 若施白象百 明珠瓔珞飾 (中略) 如聖轉輪王 普賢玉女后 端正無有比 七寶瓔珞身 如是之妙類 其數各有百

パーリ律藏 (Vin. ii 156.3-5)

百の象、百の馬、百の馬車、珠寶の耳飾りを着けた百千の少女も (後略)。

摩訶僧祇律 (T. 1425, xxii 415b20-28)

牛馬車百乘 皆七寶莊嚴 (中略) 雪山百龍象 亦以七寶嚴 (中略) 百好天玉女 七寶瓔珞身

五分律 (T. 1421, xxii 167a2-3)

(前略) 利重千金施 象馬所不及

四分律 (T. 1428, xxii 938c24-939a1)

設以馬百匹 及與百金纓 馬車有百乘 童女有百人 七寶爲瓔珞 雪山百白象 象皆有六牙 并以大聚金 及紫磨金沙 王及王供具 王所乘調象

十誦律 (T. 1435, xxiii 244a19-29)

若人得百馬 百瓔珞嚴具 草馬車一百 若百雪山象 修廣大身牙 又以純金飾 嚴身最殊異 (中略) 北方百美女 瓔珞環金印 以是莊嚴具 年少端正妙 (中略) 乃至轉輪王

(138)

『佛説心明經』の成立（平岡）

第一玉女寶（後略）

MSV 破僧事 (Saṅghabhedavastu, ed by Gnoli, i 168.10–22; T. 1450, xxiv 138c25–139a8)

百頭の馬，百の装身具，牝驪馬を繋いだ百の馬車，様々な財で満ち，牝馬を繋いだ百の馬車も（中略）雪の如く純白で，黄金や珠宝で飾られ，轡の如き牙を持ち，立派な体格で，莊嚴な百頭の象も（中略）珠宝の耳飾を懸け，黄金の腕環を付け，首にネックレスをして見事に莊嚴されたカンボージャの少女達も（後略）。

以上の比較から，大同小異だが，下線で示したように，転輪王の玉女に言及している点で，説一切有部の十誦律が最も心明經に近いと言えるのではないか。

6. 結びにかえて

以上の考察から，心明經が説一切有部の文献と深い関わりにあることが確認された。特に MSV 薬事の説話とは内容面でかなりの一致度を示し，また彼女の布施を称賛する詩頌に関しては，十誦律との関係も確認したとおりである。また，心明經と MSV 薬事の前後関係に関しては，MSV 薬事が心明經に先行する可能性を示唆した。世界観・宇宙観の発達により，一世界一仏論という初期仏教以来の原則に抵触することなく多仏の存在を認める思想的土壌が醸成されると，独覚授記は容易に成仏授記に変更が可能になる。

今回ここで取り上げた心明經は，そのような典型例とは考えられないだろうか。というのも，すでに指摘したように，成仏授記を受ける機縁となった善業は「ブッダに対する食事の布施」であり，ここには何ら大乘的要素は認められず，初期仏教以来の記述を踏襲しているので，その果報に関する部分だけを独覚授記から成仏授記に変更すれば，心明經のような経典が成立するからである。

もしもこの推定が正しいとすれば，心明經の成立基盤は説一切有部の文献にあることになり，大乘仏教の成立に関して説一切有部という部派が深く関与していたことになる。ただしその関与の仕方までは，残念ながら現時点では確定できない。ある部派の出家者がある特定の大乗経典を創作したのか，あるいは部派を超えた出家者の超部派的集団がある特定の大乗経典を創作したのか，あるいはそこに在家信者が関わったのかなど，まだまだ解明すべき問題点は多々あるが，今回の考察で，心明經の成立に関しては説一切有部の文献が深く関与していた点は確認できたと考える。

今後は部派が大乗経典を所有しえたかどうか，換言すれば，たとえば「説一切有部の大乘経典」という表現が可能なのかどうかについて考察していきたい。

- 1) 佐々木閑の言葉を借りるならば、「もともと別個に存在していた複数の集団が、それぞれの立場から新しいスタイルの仏教を創作し、独自の経典を作成し、(中略)大乘とは、複数の源泉から同時並行的に発生してきた一種の社会現象と見るべき新たな仏教運動」ということになる。佐々木閑「経典研究の展開からみた大乘仏教」、高崎直道(監)『大乘仏教とは何か(シリーズ大乘仏教1)』(春秋社, 2011, 76)。
- 2) 下田正弘は近年の大乘仏教研究を概観する中で、高崎直道の「大乘経典がすなわち大乘仏教である」という指摘を受け、「大乘をなんらかの経典制作運動として捉えることは、現在の学会の諸研究者の間において、ほとんど唯一の共通理解になっている」とし、80年代以前が大乘の経典群を俯瞰して大きな思想史を構築しようとしたのに対し、80年代以降は、いったん描かれた思想史を個別の経典研究を深める立場から問い直しはじめたとする。下田正弘「大乘仏教起源論の展望」(ibid., 48-53)。
- 3) このような観点から、昨年、法華経が仏伝をベースにして創作され、また説一切有部と極めて近い関係にあることを指摘した。平岡聡「法華経の成立に関する新たな視点: その筋書・配役・情報源は?」『印度学仏教学研究』(59-1, 2010, 143-151)。
- 4) 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』(百華苑, 1974)。
- 5) *Eighteen Principal Upaniṣads (Gandhi Memorial Edition) Vol 1*, ed. V. P. Limaye and R. D. Vadekar, Poona, 1958, 144.25-27.
- 6) ヨーロッパ仏教学の泰斗ラモットには、かの有名な大智度論の仏訳(É. Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāsāstra): Publication de l'Institut Orientaliste de Louvain 25, Tome 1-5, Louvain*)があるが、そこでは大智度論のこの説話の平行話としてMSV 薬事およびDīvyāvadānaに言及しているが、今回ここで取り上げている心明経にはまったく触れていない(Tome 1, 457-464)。
- 7) 増一阿含経については説一切有部との接点も多々確認できるが、その一方で説一切有部と相反する用例も存在するため、部派規定の困難な文献である。平岡聡「『増一阿含経』の成立解明に向けて(1)」『印度学仏教学研究』(56-1, 2007, 212-219); 「『増一阿含経』の成立解明に向けて(2)」(ibid., 57-1, 2008, 254-261)。
- 8) 静谷前掲書(230)。
- 9) 平岡聡『説話の考古学: インド仏教説話に秘められた思想』(大蔵出版, 2002, 317-323) 参照。
- 10) Cf. Satoshi Hiraoka, "The Sectarian Affiliation of Two Chinese Saṃyuktāgamas," 『印度学仏教学研究』(49-1, 2000, 1-7)。

〈キーワード〉『心明経』, 根本有部律, 大乘, 説一切有部, 『大智度論』

(京都文教大学教授, 博士(文学))